

レーザービーム倶楽部

野の城しろ知ち里さと
星野高等学校 一年

僕の隣人、工藤唯は一人ぼっちだ。どんなクラスにも一人はいるのであろう、真ん中よりはやや窓側かつやや後ろ側で静かに本を読んでいるタイプである。彼女もそのテンプレートに漏れず、静かに本を読んでいるのだが、初めて見た時から何かがおかしい気がしている。

入学式の日。かなり無気力なまま高校の門をくぐり、呼名の時に野球部に入ると思われる奴の返事がかなり本気であることを心の中で笑いつつ、担任の名前も確認しないまま案内された教室に向かった。既に女性陣はいくつかに固まって騒いでいたが、のんびりと席に着くと、子リスのように小さい女の子が隣の席にいそいそと座った。彼女が鞆から本を取り出して開くまでが一秒もかからなかったことに驚いたが、挨拶くらいはした方がいいのかな、と思ったのが間違っていた。

「やあ、僕は斎藤祐樹。何の本を読んでいるの？」

「えっ！ あ、くっ、工藤です！ えっと、『毒キノコの育て方』です！」

それが書名であることに気付くまでだいぶかった。

「毒キノコ？」

「はいっ！ ロマンがあつてとてもいいです。」

「あ、ああそう……。」「

それきり僕は彼女と口を利かない決意を固めた。気が合わない人と無理に仲良くする必要はないと昔誰かが言っていた。驚き過ぎてその他の人とろくに交流もしないままその日は眠ってしまった。

「おはようございます、佐藤さん！ あの、よろしければこの本読みませんか？」

ドサツと分厚い本が僕の手の中に落ちてくる。後僕は佐藤じゃない。

「え、いや、え？」

断る機会を見つけられないまま彼女は『猫が死ぬまで』という本を開いている。この状況で声をかけるのは余計に怖いので自分の本に目を落とす。『怪獣の卵凶鑑』『こんな生物兵器は嫌だ』『不登校完全体』の三冊で、まともなタイトルがないことに悲しみを覚えた。

一番読みやすそうだと思った『不登校完全体』を必死で読むこと一週間。読みやすそうだと思った割には無茶苦茶で、いきなり不登校の学生三十人を紹介したかと思えば理想の不登校などといったふざけたコーナーが始まり、不登校戦士イカニンジャー結成！ とアイドルごっこがはじ

まったりした。意味不明ながらも頑張って読み終わるころには彼女は教室にいないものとなっていた。他の人間にも同じように変な本を勧めたらしく、まあ当然の結果な気もする。

「斎藤君？ その本って工藤さんのやつ？」

「え、面白い？」

「斎藤ってそういう感じなの？」

「あの、工藤さんって大丈夫？」

となぜかこのように僕が氣遣われている。工藤が大丈夫かと言われると多分大丈夫じゃない。

「あ、佐藤君！ その本滅茶苦茶面白いよねっ！」

僕を佐藤と呼ぶのは工藤だろう。ああ、おう、と適当に応じておく。そんな彼女が今日読んでいるのは『あなたもレーザービームが出せる！』だった。

「出せんの？ ビーム。」

「え？」

心の声が駄々洩れだったようだ。しかし、このままでは夜に酷く気になりそうだったので是非答えを聞きたい。

「あー、えっと、ですね……。精神的エネルギーを統一して気を一か所に集めて強い意志の力を放り出すようなイ

メージで出せるらしいです。やってみます？」

それはほぼ出せないのでは。

「いや、知りたかっただけ。」

「そうですよね……。」

呑気にそんな会話をしていたらクラススの目が痛い。

「斎藤君って……。」

「え、ビーム？」

「もうダメだ……こんな高校やだよおっ！」

終わつたな、と思っていたら何人かの声が耳に飛び込んできた。

「俺もビーム出したい。」

「三つできれば感じる感じじゃない？」

「じゃあみんなで昼休みに練習しようっ。」

開いた口が塞がらないとはこのことか。こんな絶望感あふれる感じになるとは思わなかった。工藤も目をパチパチとしてる。

「じゃあ一年五組の有志で毎日昼休みにやろうっ！」

「言い出しっぺの工藤と斎藤は勿論やるよな？」

なんで僕がそのポジションなんだよ、と口にしようとしていた時には、

「はい！ 頑張ります！」

「なんでだよ！」

工藤はビームを出す気らしい。最終的にクラスの約三分の一である十二人がメンバーになった。工藤は慌ててビームの本を読み返し始めた。

第一回目は河井という真っ先に瞳を輝かせた男を中心に集会が開かれた。

「俺さ、リーダーはやっぱり工藤さんが良いと思うんだよね！」

「私はそついうのは苦手で……斎藤さんが良いと思いがす！」

「それがいいと思う！」

「じゃあ、この会に名前つけようよ！」

「リーダービーム倶楽部で！」

「賛成！」

一言も口をはさむ余裕はなく、考え事をする余裕もなかった。どうすればこの会から抜けられるのか、と思ったが、ここは適当に合わせてみんなが飽きるのを待つ方が得策かも知れない。結局作戦を考えるチームとやうに組み込まれたらしい工藤は、

「私、こんな風にいろいろな人とお話しできるの初めてです！ 精一杯頑張ります！」

と目を潤ませている。何を頑張るのかは疑問だ。

「じゃあ明日から毎日十二時からグラウンドの隅っこで。遅刻厳禁だよ！」

スケジュール系の田村さん。彼女は工藤のことがこっそりと心配らしく、唯ちゃんがやるんだったら私もやるよ、といった具合でメンバーになったどちらかというと僕と同じ被害者チームだ。そのうち仲良くなれるかもしれない。

次の日は四月にしては暑いくらいの快晴だった。我がリーダービーム倶楽部の面々は十一時五十分に全員が集会した。グラウンドではサッカー部がリフティングをしていて、野球部がバッティングをしている。このラインナップが一層悲惨さを増す要素だと思うが、みんな楽しそうなので控えておく。練習メニュー考案は工藤と石井さん。昨日の放課後頑張ったらしい。

「ポイントはさ、精神エネルギーを統一することと気を一か所に集めること、強い意志の力を放り出すことなんだよね、やっぱりさ。」

石井さんは研究の成果が出ている。工藤もこくこくと頷

いて笑顔。

「で？ 今日は何するの？」

河井が待ちきれない様子である。

「唯ちゃんと考えた結果、気を一か所に集めるっていうのが一番簡単そうってことになったの。だからその練習！」

「えっと、やっぱりビーム出すなら腹部かな、と思ひまして。腹部に体の熱を集める練習をしようと思ひます。」

「じゃーんー！」

石井さんが取り出したのは温度計。頭や足との差を一度以上にしたいとのことだ。しかし、二十分間をそれに費やしたけれど誰も成功者は出なかった。クラスでは、

「あ、ビーム部。」

「本当にやってるんだ……。」

とかなりネガティブな意見が相次いでいる。しかも、僕のおだ名が会長になりつつある。これは生徒会長など全校の会長にかなり失礼だと思う。

「佐藤君！ また明日ね！」

「あ、また明日ー！」

僕が齋藤だなんてもうすっかりでもいい気がしてきた。

驚くべきことに僕たちの活動は二か月たった今でも続いていた。五月半ばに中間テストのために一度休止したものの、こつこつと「気を一か所に集める」練習をしていた。未だ成功者はゼロである。僕はなぜか未だに会長だし、佐藤君である。今日の昼休みもグラウンドに集まったメンバー。正直よく分からないが腹部を鍛えることが大事では？ということでも腹筋を追加したり発声をしてみたりと工夫を重ねている。そうしているうちに知名度も少し上がった。これは僕にとつて好ましいことではないのだが、工藤や河合は非常にうれしそうだったので、会長というおだ名の拡散を止めるにとどめておいた。

「おはよう佐藤君。この本読んでみない？」

『お好み焼き大全』という本を渡された。わざとらしくメモ用紙が挟んであった。彼女が後ろを向くのを待ってからそつと開くと、「放課後、図書室で待つ」と思ったよりはきれいな字で記してあった。とうとう決闘か、と動揺しながら一日を過ごした。昼休みの腹筋も遅れていると河井に怒られてしまった。

「そーならー！」

適当な挨拶を済ませて、工藤はそろそろと教室を出て行く

た。少し時間を置いた方が良いのかと思ひ立ち、河井に声をかけてみる。

「帰るの？」

「ん、ううん？ 部活だよ？」

「お前が部活入ってるのは知らなかったな……何部？」

「茶道部。」

「茶道部！ 滅茶苦茶意外だな！」

「えー、そうかなあ？」

「もつとなんか……ダンス部とかに居そうだな。」

「ははっ、運動神経的に向いてなさそうだな。じゃあなー。」

普通の会話をしていることに驚きながらもんびりと、若干緊張しながら図書室に向かう。

やけに静かな図書室。この静けさが大嫌いだった幼い頃を思い出す。工藤は……奥の六人掛けの机の端にいた。

「工藤。」

「あ、佐藤君。」

「実は僕、斎藤なんだ。」

「ええっ？ それは……衝撃のカミングアウトだね。」

「えっ？ そんなに？」

そんなに驚かれるとは思っていなかったので非常に驚い

た。

「で、なに？」

「あ、あのまんがみたいな呼び出しをしたのはね、埼玉君に聞きたいことがあったんだよ。」

工藤と大して会話をしていたつもりはなかったので気がなった。

「あのね、埼玉君……。」

「待った！ 斎藤！」

「うん、わかった。あのね、佐藤君は本当にビームが出せると思ってる？」

「ううん？」

「そうだったの？ それは……そっかあ。」

「逆に工藤は思ってたの？」

「うん……。一週間前までそう思ってたんだけどね、どうやら出せないんじゃないかと思って、ね……。」

サンタクロースをクラスで一番最後まで信じていたタイプだろう。

「それでですね、会長も副会長もビームを出せないと思っている会はあまりよくないと思うんですけど。」

「まあ、みんな大して信じてないと思うけどね。楽しいか

らやっってるんじゃないの?」

「でも、それは良くないです。」

「じゃあ一回会議でもしてみるか?」

「いえ、私が頑張って一人一人と話し合ってきます。」

「ああ、工藤がそうしたいなら任せるよ。」

「あの、二週間後にここに来ていただけますか。」

「分かった。」

それからの二週間は不思議なものだった。さぼり気味だった人たちまで時間に余裕をもって集合し、やけに熱を帯びた会議が重ねられた。自主練習を始める人たちまで居た。工藤はいつも通りに見えたが、僕はなんだか不安でならなかった。

二週間後、工藤が座っていた席に座って単語帳を開いてみる。全く集中できない。

「佐藤君。」

「ああ。」

「結論から言っとね、私と君を除く十人、誰も信じていなかったよ。」

「まあそうかもしれないなあ。」

「やっぱり、会の在り方を考えた方がいいと思うんだよね。」

僕は結構このままでいいかもしれないと思う。しかし、事の発端である工藤がそういうのなら考えざるを得ないだろう。

「解散したい?」

「はい。皆さんとお話するきっかけが無くなるのは寂しいですが。」

「……。」

次の日、僕たちは十人のメンバーに話をした。

「……というわけでこの会を解散したいと思いついて、はい。」

チームメイトはみんな沈黙している。

「会長は? それでいいの?」

河井が僕をまっすぐ見ている。

「僕は、工藤の意思を尊重するよ。」

かなりの沈黙の末、田村さんが小さいため息とともに言った。

「……そっか。じゃあ、解散しよっか。」

そして、僕たちは解散した。

僕はすごく暇だ。誰とも大して話していないし、何もし

ていない。レーザービーム倶楽部の元メンバーと目が合うのが気まずい。そんなある日だった。

「なあ、再結成しない？」

河井が真剣な顔で僕を見つめていた。

「レーザービームは信憑性がないからだめだつてさ。」

久しぶりに声を出した気がして、語尾が震えた。

「あー、じゃあまあなんか強くなるのが目的でもいいや。なんかしたい。」

「くっ……。」

「……あ、でも。私はあまり、役に立たないかもしれないかもしれませんが。」

「強くなる方法考えてくれよ。」

「は、はいー！」

僕たちは「なんか強くなる倶楽部」に改名して、今度は宇宙人に襲われた時の練習を重ねている。毎日忙しくて、楽しい。